

子  
誹諧寂榮貞外

~ 5  
709



文政八酉 歳字

俳諧寂梨貞外

鶴松

門へ5列  
號709  
卷

寂梨貞外

東京生田區大久保  
餘下町百拾貳番地  
坪内雄藏

十六乃外乃矣

明治廿六年十一月五日

坪内雄藏氏寄贈

今に押さへ見たる柳之部

中々雀汁堂汁撰外乃類

道吉

源定之部

春きてすした九の野山之部

山原汁度野之部

三島精田  
川崎  
田

こゝろ 活字をなす

祢豆の汁

蓮藕のせりまき中にと汁を煮る汁

如何にと祢豆を煮る汁

乃煮る汁

負島の汁

牛呵る聲に鳴きしる

如何にと負島を煮る汁

の煮る汁

類の汁

曉哉いふやにのまき書も部

そまきまきと耳と汁部公

なくと汁の雷の物をかかり

那の部はるなまき時ハ友を那枯まきと世を

那の部の煮る汁

那の部はるなまき

。亦

秋を待つる外牛に在る月の

是とと外の数一句のほりと心付る

。別外

世の口はるる霜の枝

中に初をきく故にわたり外一句のほり

怪書<sup>ウラガ</sup>又句にたりと

いかりにときく外一句のほりを

。か又字の外

振るる常のさまにか

那のとくよに外とく時一句を

故に着人みか外とくせぬ外一句のほり

外とく老人あり外とく涯よ二二句

よくたつてしまり外とくおく句の

調ひたる時のたまふり中

執し

かみしん

月は——今宵、汐と満るる都

ウツスツメフムエルをり續分はる深哉ふり

故に并句の上に也字をき——深く都

切せらるる——今宵の汐と満るるをり

てはるる——今宵の汐と満るるをり

然——句を別をき——故に也字のきき

てにあはるる——今宵の汐と満るるをり

中——一句のゆり終——句を別をき

埋火の口ふりの責にあはるる

焔のゆりゆり見ゆるる

はるるのゆくは責のよきまを如神の——とて

あはるるてにおがく——一句の度つてき切

をり乗時——一句ゆりた——終るる別をき

風乃方ハ——中身に似るる茶

嬉しき——茶を梅の——茶

是も浮世ふり一句の流しをたふす  
法よりの流しをせしむるは切又切の  
諦なきに於てを別する  
此を田舎の入をふり

世に二様とあるよりあぐに死ん

是も浮世の物の世をさしふる  
りく冷しむるは世の世を  
死ん先の

あつむ

み枯ら風の体みとあるを

世を執るは是と道息のしり  
をせしむるは世と野と執せし  
れ道し

言ふ切てふのほく

世とのゆふくさす

如る籠かりて流しをらん

かたはくせしむるにせむるはむらさき **成** 上の猶もくま

さしそりあしはくはく **活活** 成

けんとあを結り **下** 成

てらくせむる **成** 成

成の留茶の通を **成**

。成るる部

成乃 成なる人の部

成なる色を成なる多の成なり

人信いさる **成** 成なるまたに **成** 成

成押斗る **成** 成に **成** 成

。成の部

成教て 成なる **成**

是ふし 成の通 **成** 成の **成** 成

成 **成**

。成

成柳 **成** 成なる部 **成**

ちかやうに〜

是も三度の折に〜又あま〜

及〜に〜部〜他〜

と考及〜乃其〜

己の〜自由世結の〜

物〜

口合のや〜捨る奇

花蝶の〜

羊も〜に〜

故〜

な〜

けん〜

故に也〜

切〜

お〜

湖の〜



枝ががくまにぬまを椿を

結ぶの心をすくすく別に起るをく

あまをくすくすをくすくすをくすくす

湖の陰月をくすくすをくすくすをくすくす

あまをくすくすをくすくすをくすくす

のこころの中にくすくすをくすくす

おまのこころの中にくすくすをくすくす

兼張の眼に古蝶のぬまをくすくす

唯にいらのぬまをくすくすをくすくす

眼に古蝶のぬまをくすくすをくすくす

後を續くぬまをくすくすをくすくす

右所の外

高城のぬまをくすくすをくすくす

道灌のぬまをくすくすをくすくす

右所のぬまをくすくすをくすくす

はあ～のぬまをくすくすをくすくす

也奇甚  
あはれとらふをきく者  
あはれふの福<sup>福</sup>は新なるやとあはれ  
あはれなるあはれのおこりにふりあは  
あはれ故に化せざるなり能く者て我  
中<sup>中</sup>に亦

夕類  
業

は秋のふり  
是は乃字の業  
入て國を  
名は乃奇  
らゆあるよ秋のふり  
夕類あは

はあはれ秋のふり  
あはれ是はあはれ  
秋杯よはれ  
のうよいあはれ  
古今集

あはれはあはれ  
あはれはあはれ  
あはれはあはれ  
あはれはあはれ

清るの御所能く春を

。おしりの歌に

まげ一ひ月をいふをいひしる

のよち歌あはれおしりの

是らも能くはしるる

先の歌もよのちの歌もくはれ有やもはれ

能くまわはれはしるるに

是れは能くはしるる

公羽のよもはしるる

あはれ公羽のよもはしるる

瓢箪のよもはしるる

二重のよもはしるる

能く能くはしるる

るるるるるるるるるる

るるるるるるるるるる

能くはしるるるるるる

是をえと案——  
執是外一あ——  
云々系——  
類乃也

春の如く蜂の巣は心と扇枝の漏

青柳如木——  
別にも

今——  
法定の

京中——

のの  
法  
稱美の

濡以流お大わつ——

如何——  
のたまたまを——  
入て

。真長のお

身の於て未だのこころの神話

のしるしをいふ。真長は海へ入る

常のまゝの心をもつて道を行く

。秋のお

蓬萊に空をよる浮城のまはりの芭蕉公羽

はしるしをいふ。秋は海へ入る

或は入る。赤き心にも空をよる

。蘆の根にらるる海へ

。押斗るお

秋春をあれおる。山のおも

。今しるしをいふ。秋は海へ入る

。秋は海へ入る。赤き心にも空をよる

。秋は海へ入る

。秋のお

あうてお蝉る。秋は海へ入る

能くはるる

あまのこにさ

あまのこ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

あまのこにさ

腰中にてとまきしもの

籠居る木の實牝の實貝拾ふ

形捨るゆきま赤中に木の實牝の

實貝の中ふ切あり是十のよくりををの

心とぬきおる海

一里いほをもたもの子孫の

物捨るゆきまふりまはととりたに

てにたふありとふりまははるふりま

切たるあそむるまはるまはる

りるし執事一也

休たふる

意ひたし美まはる乃松の

ぬきおるまはるゆきまはる

まはるのまはるまはる。ゆきま

らまはるまはるまはる

物の

人々も一掃見ふも月の夜

物の世に二色ありてたうたむこと

やさしきありて下には平なむこと

春もさしありて秋もさしありて

是木の類皆しろうたむこと

分別も毎

よこや

問ひ答ひの書とていふも

問ひけるよこやとていふも

よこや

汐ありて雲徑ぬきて海を

氏義野の月ぬきありてその也

皆の名所の也いふも

海をありて

あはみよの浦くはくち

はるにおおの坂田袖の浦くはくち



新故にあはば<sup>し</sup>すあはら<sup>く</sup>にあは<sup>ら</sup>く  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>  
あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>

杯乃ゆしとる業也といふ人に遠あり

新とて二色のあはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>

あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>

あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>

あはら<sup>く</sup>

遠里のまゝ草木程や折あきみ

同し柳あきあはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>

あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>あはら<sup>く</sup>



亦

世也秋也海人控子の時時

是と五也の猪をり——がふし、かき  
 皆と口合の也下の也をたり切る  
 一ふのほり怪き屋——於る別をな  
 勝乃也  
 むはか——  
 郭公時横しゆゆの乃

勝乃也い法法くをる時あぬ

系りたう——也半屋をよにかし  
 中——にむらりけ  
 幾なりよにまかして能くもま見る前に  
 て也をまを屋——元をりヤイユヨをり  
 也さうして控を拾るり

以年也親に白紙をかき——  
 少——の紙を移川にらるる

も、真まのしあしを百白一

外に何たてにたはらさむくまの時のまゝ  
えの二つ結こてにまゝのまゝのまゝ  
中 一まゝのまゝのまゝのまゝ  
中 一まゝのまゝのまゝのまゝ  
。まゝのまゝ

え日に田毎のまゝのまゝのまゝ  
まゝにまゝのまゝのまゝのまゝ  
而乃路算にまゝのまゝのまゝ

中 一にまゝのまゝのまゝのまゝ  
是のまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
ゆるまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
中 一にまゝのまゝのまゝのまゝ  
中 一にまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

み乃山 人 俗をさる人の也

是亦とすはを言はなす

融く老る

。其れる也

口切に堰乃 唇をなす

石女乃 離か

葛ヶ浦 桑日 和

初其をいふは ける才とる人 執る

年 一 是を 聲乃 かる 其 蟋蟀

是は其を言切て ける才乃 諦る

。不其

盃に 泥乃 流る

婦み かる

しは 来よと なる

杯いふと 同人 あり 然る 別を 居る

ぬ

かきし ちぬく屋敷 くの枝の女

をいし けぬきて う志 縁に 貞ぬ 更衣

法 院 多 乃 志 今 有 月 に かり ぬ 后 の 月

是 八 年 ぬ 志 あり 志 けり ぬ たり ぬ 杯 志

洲 へ 別 に ぬ 乃 志 の 村 八 年 ぬ 志 志 志

る ぬ 志 志 ぬ 志 志 志 志 志 志 志 志

娘 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

ぬ 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

声 乃 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

八 年 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

ぬ 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

一 子の 羊の 群集 庭 梅の花

現生乃 一 ちり

あつこく 庭を 見ゆ 一 神教

未末木乃 一 糸 一 皆 一 切の あり

こま乃 一 ちり

久 一 黒 一 庭 一 庭 一 庭

庭 一 庭 一 庭 一 庭 一 庭

庭 一 庭 一 庭 一 庭 一 庭

庭 一 庭 一 庭 一 庭 一 庭

見ゆ

林葉の 影あり 庭の 月

是乃 乃 なく 庭を 見ゆ 一 庭を 見ゆ

小舎人 ちり 庭 一 庭

庭 一 庭 一 庭 一 庭 一 庭

ウツスツ 又 ツムヨル 庭 一 庭

庭 一 庭 一 庭

わらわはさし見をけりる美を帯乃寫す

聴く今しんふ乃をよのちをん

二反切

君火氣あけし能あひせん帯すうり  
クにも物しはあけ爪のま

三反切

子とまふいなき笑ぬ爪あし

三反切の如く道のうりし一乃帯をた

月三青きふし時を物あつる

三反切の如く

あめと日はれあくと秋の風

又

世は籠りてあし田の行とせし  
人にあめをけし我ハ年をん

古今集に換物乃切せし

あまらに只一乃乃作りふりわ老井の

あしやく正風乃發りしらは四  
とみまの管をひきし中より又一の手に集  
切の音をと人のあしやくし乃はり  
あしやくとまをひきし一編とまをひきし  
○病の奇の事

あしやく

とみまの管をひきし中より又一の手に集

切の音をと人のあしやくし乃はり

あしやくとまをひきし一編とまをひきし

○病の奇の事

あしやくとまをひきし一編とまをひきし

あしやくとまをひきし一編とまをひきし

あしやくとまをひきし一編とまをひきし

あしやくとまをひきし一編とまをひきし

あしやくとまをひきし一編とまをひきし

あしやくとまをひきし一編とまをひきし





しりて皆勝おあり又さていふと  
う那さるんちの事

言装し一層とけいひつらさる事  
南ては常とさるうとて写後事

梅一本二本とけいひつらさる事

日く心もあつたうとてあつた  
ふりせしにいふうと解おれもある  
於勝にてにあつたうとていふ乃は

なきは漢字より一ありはる老金  
手廻る事

いふは物たさるうとて  
いふは風あつたの蜻蛉  
いふは世の事さる事

いふは物乃云ふ事あるは  
いふある事  
いふは事ある事

河乃乃卵加後一卵如之耶

是と物たまは卵の物に

一結と諸物乃其を危

河乃未乃若やと志る白の

芭蕉翁伊勢ガ白ナリ

是とよに物多まはも

一多まをよ

結と諸物此らと

亦云古集に

風情是是未との耶と云ある

長かり長早ちり風情ふりと

ありた一飛人の結と

形書記もすもあ

一其日乃乃

亦長なる耶長田なる耶風情

成外中作実乃計あり

一又ちら一お

心なきは是とてあはれに  
是亦と白くはるる乃はあはれ  
只執行乃身一なり

通文くま

去乃本乃雪やも葉中形乃は

流は波白はははははは

跡まを先由る夫をえきし

由入の形勢より由文乃

みま 初えのえりまを

意進の排體のそるあ

亦ははははははははは

時ハ尾てふをのま

白意深くまを乃叶ひ

中 田来難ふ別

輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪 輪

石物 加 香 羽 傳 丸 雨 水 野 定

野老の多し自筆の書一 水乃溪

久しあきま 飛分は執 一をあるは

北一書は祖翁枕乃月紙諸と乃記り

即先を 藤栞舎法峨乃日記紙抄録

一書は 一書は 柳乃鳥群乃記り 抄録

一書は 一書は 如他見の悟友の一書乃未だ故之

若くは見の目に記す 倉新亦乃多し

野強傳乃老の別書に記す 一鶴松書

芭蕉の書乃り

秋城

乃乃海の青柳乃小而なる道なる

折 一海風にありありと

折 一海風にありありと

ありありと 一海風にありありと

ありありと 一海風にありありと

秋城

文政八酉 文月吉白

信濃國 西科

龍夏館

仁中堂

朱除色

武日阿

鶴松書

松山 中麻子 會村 國天 長谷 一茶

*[Faded cursive calligraphy]*

**大**



